

教員の自己点検・評価シート(2025年度春学期)の分析

2025年11月18日
教学マネジメント会議

教養教職機構

1. 全体的な傾向

①授業改善と自己点検

- ・各教員が授業内容や進行方法、教材・資料の分かりやすさ、能動的学習の導入などに積極的に取り組み、自己点検を通して講義の質向上を図っていることが確認できる。

②学生の興味関心と学習意欲の向上

- ・時事的な話題や身近なテーマの取り上げ、本物の体験機会の提供、メディア資料やデジタルコンテンツの活用、グループワーク、学生同士及び教員との対話・討議などを通して、学生の興味・関心を喚起し、学ぶ意欲や楽しさを実感できる授業設計の工夫が見られる。

③知識定着と双方向のやり取り

- ・課題や演習、討議、ミニツツペーパーなどを用いた段階的な学習支援が行われ、学生が何をどのように学んだかを重視する姿勢が確認できる。また、学生への声かけやフィードバックを通じて、教員と学生の双方向的なやり取りを大切にしていることがうかがえる。

2. 特筆されるべき事例等

- ・授業アシスト制度を活用し、より実感を伴う学びを実現する工夫がみられ、学生の興味・関心や学修意欲の向上に寄与している。
- ・毎回の授業においてアクティブラーニングを実施するとともに、授業後半では学生同士が協働しなければ解決できない課題を提示するなど、**「自然に協同が生まれる緩やかな協同」と「意図的に仕掛ける協同」**を効果的に使い分け、多様な学び方を提供していることがうかがえる。
- ・議論を促す問いや、学生自身の経験や関心に結びつくテーマ設定など、学生の実態に応じて多面的な動機づけを高める工夫が見られる。

3. 改善事項の発掘

- ・学生の授業への取り組みに対し、教員側が様々な工夫・改善を試みる一方で、学生の受動的・消極的な授業態度や学びに対する目的意識・意欲についての温度差等の記述がみられる。学生のコミュニケーション力や主体性等の課題を指摘する意見もあり、学生の現状やレディネスを把握しながら、引き続き、学生への学ぶ目的の明確化や学び方の創意工夫、意欲の喚起等について検討していく必要がある。

4. アクションに向けての要検討事項等

- 引き続き、各科目における学生の学修意欲向上に向けた工夫・改善を引き続き検討すること。

経済学部

1. 全体的な傾向

- ・各教員が、講義の内容や、配布資料・板書などの実施方法などの面で、講義レベルの継続的な改善に取り組んでいることが確認できた。
- ・講義の到達目標については、ほぼすべての科目が達成できたと評していた。しかし、社会・経済の現象や理論に関し、より深く、多面的な考察できる能力を身に着けることが課題となっている。
- ・約 8 割の講義でアクティブラーニングの取り組みが行われていた。(今回の経済学部の自己点検評価には演習科目は含まない。) 2024 年度秋学期の点検評価の改善事項の発掘で、学生の主体性の喚起が指摘されていたが、これに対し各科目・教員レベルで主体的な学修を促す工夫が行われていることが確認できた。
- ・LMS (Learning Management System) を活用している科目も約 8 割に及んだ。資料配布、課題提出、学生への連絡に用いている例が多いが、学生の意見の共有などに活用している例も見られた。
- ・例年同様、学生の基礎学力(数学等)、学習意欲の差に関する記載が多く見られた。
- ・特に大人数の講義を中心に、アクティブラーニングや学生との対話に課題を感じているとの記載が散見された。データサイエンス学部設置に伴う定員減後も 370 名の規模の学部で、大人数講義での学生との対話が課題となっている。

2. 特筆すべき事例等

- ・大人数の講義で、LMS を用いて学生の意見を共有することにより、学生の関心の喚起に努めた取り組みを行っている例があった。
- ・学生の学力・理解度の差への対応として、優秀な学生向けの追加の教材を配布している例や、講義の解説は重要な点にとどめながら、資料には詳細な情報を掲載している例があった。
- ・例年、本学の学生の気質として、質問・意見・グループワークなどに消極的な学生が多いとの指摘が多い。これにつき、質問・対話の時間を確保することで、対話の機会を確保できたと記している科目があった。

3. 改善事項の発掘

- ・学生の学習意欲や、グループワーク等の取り組みへの積極性に差が大きく、消極的な学生への対応に課題を感じている例が多く見られた。また学年・学科による受講態度等の違い、特に特定の学年・学科の受講態度に問題があるとの記載があった。今後注視していきたい。

4. アクションに向けての要検討事項等

- ・初年次科目を担当する教員から、大学の早い段階で経済学の専門的科目により触れたいとのニーズが学生にある可能性が指摘されていた。現行のカリキュラムは、1 年春に経済数学を履修、その後ミクロ経済学・マクロ経済学に段階的に履修する流れとなっている。早い

段階で経済的思考に触れる科目として経済学入門を位置づけてはいるが、その他のカリキュラム上の工夫が可能なかは、検討課題である。

- ・数学の計算を不得手とする学生に関する記載が散見された。数学については入学前指導があるが、学校推薦型選抜の対象者のみとなっている。一般選抜の入学前指導は時期的に困難な面が多いが、今後の検討課題である。

データサイエンス学部

1. 全体的な傾向

昨年度開設された学部であり、2 年生受講科目については、初めての開講となる。2 年生になり、徐々に科目の専門性が高くなり、学習難易度が高いと感じる学生が増えてきたと考えられる。科目の難易度調整・内容の復習など、各教員が工夫を凝らした講義・演習を行っていることが確認できた。

2. 特筆すべき事例等

- ・1 年生科目については、昨年度学生の理解度が低かった箇所を把握し、今年度の学生に理解を促すため、予備知識を含め丁寧に解説するなど、昨年度の講義を踏まえた工夫を行っている事例が見受けられた。
- ・演習においては、TAを活用し、授業中での質問・授業外での補講を行い、課題提出が遅れがちな学生に対しても適切に対応している様子が窺えた。
- ・学生間に、IT リテラシーや数学などの基礎学力にバラツキがある程度存在する。学生間の習熟度の差をなくすために、講義科目であってもグループワークなどを行う、理論だけではなく実際にデータサイエンスにおいてどのような応用が可能かを理解させるなど、工夫した指導をしている事例が見受けられた。

3. 改善事項の発掘

- ・主に演習科目で必要な PC の操作、分析のための基本的なソフトウェア利用が難しい学生について、対応を検討する必要がある。
- ・数学・統計・解析系の科目は、学生にとって有用性が理解しにくく、また科目名だけで難しいと思ってしまう傾向がある。科目の有用性を周知する方法を検討する必要がある。

4. アクションに向けての要検討事項等

- ・高等学校においての情報・数学の履修・修学状況を事前に把握し、教員への周知を検討する必要がある。
- ・完成年度にむけて、現カリキュラムの問題点を検討し、カリキュラム改変の必要性を検討する必要がある。

看護学部

1. 全体的な傾向

- ・新学部1期生で、初回開講の科目ばかりであったが、各教員が学生のレディネス把握に努め、学生のレディネスに合わせて授業資料の工夫や、小テスト・レポートによる学生の理解状況の確認、各授業アンケートなどをしながら授業の到達目標に向けた取り組みをしていることが確認できた。
- ・全教員が資料配布や小テスト、各回の授業アンケート、出席確認等を LMS の活用事例としてあげ、LMS の活用で学生が事前・事後学習に効率よく取り組めるようにしていることが確認できた。
- ・専門教育科目の授業では、グループワークやディスカッション、反転授業などアクティブラーニングを導入していることが確認できた。

2. 特筆すべき事例等

- ・学生の学習意欲維持・向上のために、授業内容と国家試験過去問とを関連づけ重要項目の説明を行った事例が見受けられた。
- ・臨床経験がない学生が看護場面や用語の概念が理解しやすいように、教員の具体的な看護実践経験を例にしながら説明するなど、理論と看護実践の関連をイメージ・理解できるようにしていた事例があった。
- ・「スタートアップゼミ」では、学生の各個人の大学4年間の到達目標を明確にし、アドバイザー教員がそれにコメントすることで双方向のコミュニケーションが図れるようにした。

3. 改善事項の発掘

- ・他学部教員による授業（兼担）については、看護学教育における当該科目の位置づけや国家試験の出題傾向、及び学生の学修状況等の情報提供を行う必要がある。また、授業後の様子を担当教員に確認し、学生の学修状況に関して情報共有する必要がある。
- ・学生の学ぶ意欲・姿勢にバラツキがあるとの記述が見られることから、学生の学ぶ意欲を喚起することが課題である。

4. アクションに向けての要検討事項等

- ・学生は基礎である「看護学概論」（必修）と発展的学習内容である「ケアリング」（選択）を同時履修していた。「ケアリング」の開講時期を検討し、履修時期について指導・助言する必要がある。
- ・複数教員が関与する科目では、指導方法・評価についてより一層の共通認識に基づいた指導できるような方略を検討する必要がある。

国際交流センター

2025 年度春学期においては、反転授業や事前課題、丁寧なフィードバック、語彙や文法の

定着練習などを通して、学びの流れが見える化し、対話しながら学ぶ姿勢を大切にする授業が展開された。また、新聞やドキュメンタリーなどリアルな素材を使ったり、学生の興味に合わせて教材を選び、発表につなげる工夫が成果につながっていた点も印象的である。一方でこれまで同様、学生の学力差への対応や事前課題の取り組みの差、文章を自力で書く力が十分に育っていないといった課題も共通して見られた。これらを踏まえると、今後は役割分担を明確にすることや、課題への取り組み状況を把握できる仕組み、資料の選び方や調べ方を教える支援などを取り入れることなどの検討が必要である。